
甘い彼女と甘くない彼氏～その後のThe Great Escape～

ササ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘い彼女と甘くない彼氏〜その後のThe Great Escape

【Nコード】

N4910J

【作者名】

ササ。

【あらすじ】

大学生になった、ゆいのもと中野君の話。女子校育ちで免疫の無い彼女。彼氏は年上だけど、同級生。うかつな彼女が、可愛くて仕方ない彼氏はDS。ラブコメです。7月2日番外編追加しました。

甘い彼女1（前書き）

The Great Escapeの続編です。読んでなくても大丈夫です。

甘い彼女1

「結局、中野君のひとり勝ちかあ……」

真新しい校舎は、茶色いレンガ造り。男女共学の本校舎を中央に、特別教室の入る別棟が左右に建っている。その校舎のどこを探しても、男女を隔てる壁など無い。更衣室とトイレを別にして……。

「教師のできる事なんて、たかが知れてるのね……」

日当たりの良い保健室の窓を少しだけ開け、春風を引き込む。理事の娘でもある彼女は、窓から見える付属の大学を見てため息をついた。たかが知れている。知識も経験もある彼女でもできなかった事を、あの小娘はやってのけたのだから。

『先生、賭けをしませんか』

あの日。その声の余りの冷たさに、一瞬息を飲んだ。子供のくせに。そう侮っていた自分を、あの少年は一瞬で凍りつかせた。耳元にかかる、少年の声。わかっていても、騒ぐ胸。あの年齢とは思えない、色気。

「木村ちゃんも気の毒に……」

心地よい春の日差し。彼女は目を細めると、一人で笑った。気の毒な、木村ちゃん。

「蛇に睨まれた……」

中野君は蛇。冷たくて、真っ赤な舌を出す。そこまで考えて、彼女は腕を組んだ。

「あの子は……」

首を傾げると、首元で華奢なチェーンが揺れた。あの子は、例えるならなにかしら？ 正直過ぎて真面目で……面白い。やたらと走る、健気な子。

「きっと、中野君の手の平で転げまわってるんでしょうね」

どんぐりころころ。彼女は笑った。それはさすがに失礼かしら？
なんて。

「……本当に、大丈夫かなあ」

あたしは、嘘が苦手だ。

「大丈夫だって！ ……そんな事より、その格好の方が問題よっ」

京香^{きょうか}はベンチに座ったまま、上から目線でファッションチェックを始めた。ありえないだとか、気合が入ってないとか……ようするに、色気が無い、と。

「だって……普通にしないとバレちゃいそうなんだもん」

なんて、言い訳をしつつも、どこが悪いのかいまいちわかってないあたし。まあね、確かに色気はないさあ……。けど、その方が京

香的にもいいじゃないのかしら??

「ゆい。あんた、どうせ数合わせとか思ったでしょ、今」

「正解!」

「もうっ! もっとやる気だしなさいよっ。大学っていえば、コンパでしょ。初めてできた彼氏だか何だかしらないけど、遊ばなきゃ! もったいないわよっ」

もったいない……。言われれば、そうかもしれない。キレイに盛って巻いた髪と、とがったヒールに込められた気合。甘い香りは、通学だけに留めておくのはもったいないかも? あたしは京香の横に座り、自分の足元を見つめた。

「あたしはこれくらいで、良いんだもん」

さすがに今日はスニーカーを履かなかった。ストラップのついた、まるいおでこの靴。散歩しながら通学するあたしには、ヒールはキツイ。それに……。

「また、そんな事言っ! ちゃんとカワイイよ、ゆいは。あたしはカワイイ子しか誘わないんだから!」

「そんな事言っ。目当てはこれでしょ」

バッグから取り出したのは、ノート。今日の午後の講義の内容がしっかり書かれている。

「ありがとうー!! やっぱり持つべきものは、かわいくて賢いゆ

いちゃんっ。お礼に今日はゆいと好みがかぶっても譲る」

いや、だからかぶりませんって。あたし、彼氏いるんですけど……。なんて、言いかけてやめた。どうせ京香は聞いていないし。ノートを抱きしめてはしゃぐ京香。どうもあたしは男好きな女の子に好かれるらしい……。京香はまるで、マナをパワーアップさせたような子だ。大学には勉強より、遊びに来てますってオーラがでるし……。

入学して最初の授業の日。あたしはたまたま京香の横の席に座った。ノートを広げ、しっかり書き込むあたし。京香は横で、ほおづえをついて退屈そうに辺りを見回していた。

「……気にならない？」

急に話しかけられた。京香は自分を指差した。

「私の存在。邪魔じゃない？」

言っている意味がよくわからなかった。あたしは一瞬だけ考えて答えた。

「邪魔じゃないです」

「来なきゃいいじゃんって思わない？」

あたしは、首をかしげた。

「なんで？」

あたしは京香の顔を思いつきり覗きこんだ。なんで？　ってすごく気になった。余程、変な顔だったのか京香は声を押し殺して笑い出した。

「ねえ。この後、下で買い物に行かない？　あたし、ニキビできそう
で嫌なの」

京香はそう言って、一階の売店へとあたしを連れて行った。そこでニキビに良く効くという、小さな栄養ドリンクをおごってくれた。

「これも飲んでね」

京香はバッグから、たくさんサプリを取り出してあたしの手の平にのせた。ああ、キレイな人は毎日大変なんだなあって思いながら飲み干した。京香の顔のドコにニキビがあるのか、あたしにはわからなかった。

その日を境に、なぜか一緒に行動するようになった。おかげで、構内を歩くと男の視線が痛い……。

京香に連れられ、大学近くの居酒屋。あたしは、誰にも（というか知り合いに）会いませんように！！　なんて祈りながら席に座っていた。新歓コンパ。多分、この居酒屋にいるのはみんな大学生。ていうか、あたし未成年なんですけど……。

「ハジメマシテ。俺は太一。よろしくね」

ああ、どうも。あたしは頭を下げた。どうも、こういうのは慣れ

ない。太一君。ええーつと。太一君は、茶色いウェーブのかかった髪をしていた。おしゃれパーマの太一君。頭の中で勝手にあだ名をつけた。

「俺は、しらいし。白石君って呼んでね」

もう一人は黒っぽい服装の、シンプルな顔の男子。少し長めの髪を外ハネにした、セツトに時間のかかりそうな人。

「お友達、大人気だね」

なぜか、太一君と白石君はあたしを挟むように両脇に座った。白石君が指差す先にはお友達。向こうで男の子達に囲まれている、京香。女子校育ちのあたしには、こういうのはハードルが高い。

「で、キミの名前は？」

おしゃれパーマの太一君が、近づく。いや、ちょっと近すぎるんですけど。

「木村……ゆいです」

京香だったら、苗字なんて言わないんだろうケド。あたしはどうも下の名前をかわいく自己紹介する事ができない。

「ゆいちゃん。よろしく！ほんとカワイイね」

おしゃれパーマは強引にあたしの手を取り、握手した。白石君の方は、誰かに呼ばれたのか、いつの間にか席を移動していた。

「……それは、ないです」

酒くさい。テーブルには誰のものだか、もうわからないジョッキ。新観コンパって……ただの酔っ払いの集まりかよ！ 叫びたいあたしに、太一君はなおも寄り添う。ああ、もう帰りたい……。壁の時計は、八時を過ぎていた。ヤバイ、門限。大学生になったあたしには、誰かさんの決めた門限が存在していた。

「五時にしましょうか」

満面の笑顔で、彼はそう言った。五時。それは何の時間??

「僕がない日の門限ですよ。ゆいは、すぐに攫われてしまうからそれくらいが丁度いいでしょう」

「あのお……。今時、小学生じゃあるまいし……」

一応、反抗してみる。彼は一つ年上の、彼氏。もおんのすつごく意地悪な、彼氏。

「今時の小学生は、ゆいよりもっと警戒心をもっていますよ。それに……」

運転席の中野君が、あたしに近づく。相変わらずの白い肌に、シヤープな顎のライン。きつと、あたしの顔の方がデカイ。キスするの？ 軽く開いた唇が……。なんかやらしい。

「今時の小学生の方が、ませてますよ」

キスする寸前で、中野君の動きが止まった。触れそうで、触れない距離。ああ。一番恥ずかしい、距離。

「どうします？もっと遅い時間がいいですか？遅い時間がいいいなら、もっと大人になってもらわないと……」

「ご、五時でいいですっ！五時までには帰りますっ！」

「いい子ですね、ゆい。では五時を過ぎたら、大人の時間ですよ。約束を破ったら……。楽しみですね。僕はそういう事を考えるのが得意なんですよ」

天使の笑顔で、中野君はあたしにキスをした。きっと、心の中には悪魔。いじわるなあたしの彼氏。

甘い彼女2

春は出逢い。新しい学校、新しい……バイト。

『ああっ!』

礼儀正しい青年は、「はい、よろこんで」とオーダーを受けながらも、内心、気が気じゃなかった。ネームプレートには、『気合はいつてます! 新人 後藤』の文字。彼は、さっきから奥の座敷が気になって仕方がない。

『委員長……浮気は駄目っス』

隠れた方が良いのか、どうどうと注意した方がいいのやら……。亡きリーゼント、今はすっかりした短髪の後藤君は迷っていた。委員長の手には、オレンジジュース。そこはOKっスなんて、心で思っていた。けれど……彼の頭にはもう一人。仲間の顔が浮かんだ。『何か見つけたら、連絡して』入学前にここでのバイトを教えた時、言われた言葉。

『何かって……これの事っスかあ?』

空いた皿を片付けながら、二人の顔を交互に思い浮かべた。

「だーから。携帯貸してっ」

「何で?」

「何にもしないからっ。俺の携帯とこうやって……繋げて遊ぶから」

おしゃれパーマの太一君は、携帯片手にさっきからあたしに絡む。携帯番号。教えて欲しいらしい太一君と、できれば教えたくないあたしのバトル。太一君は、手ごわい。おもしろい言い訳を考えては、あたしに挑む。きっぱり断っても、笑い話に変えてしまうあたり相当遊んでるっぽい。

「たいちー。京香ちゃんが呼んでるよー!」

どこからか、男の声。ダラダラしていた太一君がすっと立ち上がる。

「ええ!もう、しょうがないなあ。待っててね!ゆいちゃん!」

……素早い。絶対、酔ったふりしてたなあ。あたしは大きくため息をついた。知らない人に囲まれているからかなあ。何か、疲れる。高校生の時とは違う、大学生のノリ。こういう場所だからかなあ。初対面の男の人は、みんな軽い。

「ゆいちゃん、こっちおいで。助けてあげる」

ええっと……そうだ。白石君。太一君がいなくなった席に、白石君がやって来た。『助けてあげる』そう言って、輪の中に座るあたしをひっぱって行く。

「えっ、ちょっとドコ行くの」

「ここにいたら、太一に絡まれちゃうよ。だから、あっちに行こう。」

あっちの席なら、気付かれないよ。後で、京香ちゃんも来るから」

白石君が指差すのは、あたし達がいた大部屋とは違う。入り口近くの少人数の、半個室。

「じゃあ、京香が来るまで……」

白石君は、京香が目当て。あたしは勝手にそんな想像をして、安心していた。白石君はちよつとナルシストっぽい。だから、あたしの事なんて眼中にないはず。あたしはすっかり安心して席に座った。

「ゴメンネ、勝手に頼んじやった。オレンジで良かったよね」

席に座ると、すぐに運ばれてきたドリンク。オレンジと、ウーロン茶。白石君も飲まないんだ。あたしは、勧められるままに飲んだ。

「太一のやつ、しつこいだろ？ごめんね。もっと早く助けてあげたかったんだ、本当は」

はぁ。それは親切に……。なんて返事をしながら、あたしは京香視線で探した。一体、どこにいるんだか。

「でも、ゆいちゃんも太一が気にいつてるのかなあって……」

「……それは、無いです。あたし、今日は数合わせだし。それに……」

『彼氏がいるんです』そう言ったら、変に思われるだろうか。『別にお前の事狙ってねーし』とか『やっとできたからって自慢する事かよっ』とか……。

「あたし、こういうの苦手なんで……」

迷ったけど、無難に答えた。苦手。まさにそう。知り合ってすぐ恋愛関係に……とか無理。なんか、こう……。うん。何で、出逢って口説く。大学生に片思いは、存在しないのかあ??

「俺も苦手なんだ。……でも、良かった。おかげで今日はゆいちゃんに会えた」

向かいに座っていた白石君が、隣に座る。ん? なんで?

「ゆいちゃんって、他の子と違うよね。初対面なのに、俺。ゆいちゃんの事、好きになってもいい?」

白石君の手が、肩にのせられる。どうしよう……。逃げ場が、無い。

『ご新規ごあんない!』

入り口で、威勢の良い声が聞こえる。雑多な店の中で、店員さんの声さえすぐにかきけされてしまう。

「いやっ、あの。困る、困る、困る。えーっと、ほら、白石君は京香狙いでしょ? そんな、手当たり次第に声掛けちゃ駄目だよ……」

ふるふると首を振るあたし。全く想像していなかった展開。ああ、彼を一瞬でも信じたあたしが馬鹿でした。

「ウーロン茶下さい」

ん？あたしと白石君の間に、微妙な空気が流れた。

「はい、よろこんで」

これまた威勢の良い店員さん……。ああっ！！

「お前、誰？」

あたしの肩に手をかけたまま、白石君が尋ねた。4人掛けのテーブル。あたしの隣には白石君。そして……。あたし達の向かいにもう一人……。

「俺？ 法学部の1年」

テーブルに頬杖をつき、涼しい顔でこちらを見ている。

「で？ 何？」

白石君が尋ねると、彼は笑顔で答えた。

「別に。どうぞ、続けて」

ああ、もう死にたい。

「ゆいちゃん。どうしたの？」

真っ青なあたしと、ワケのわからない白石君。そして……。

「どうぞ、そのまま続けて下さい。僕はここで見てますから。……」

何ですか、ゆい？して欲しい事があるなら自分のお口で言ってください」

笑顔の中野君。白石君は、中野君とあたしを交互に見ていた。

「……もしかして、彼氏？」

何度も頷くあたし。

「そっか」

白石君はあたしに手を振ると、席を立った。残されたのは、二人。

「あ、あのお……」

「出ましようか」

中野君はそう言うと、あたしの手を引いた。

「ゆい。一人で来たんですか？」

「友達に誘われて……」

あたしは京香の事を話した。

「こんな所に、女の子を置いて帰ったら駄目ですよ。二人で来たなら、帰りも二人で帰りなさい」

危ないから。中野君はそう言った。そっか、そうだね。京香はあたしよりも、かわいいからきつともっと大変。

「きょうか」

あたしはさっきの部屋に戻り、京香を探した。

「いやゝ。間に合って良かったっス」

後藤は何故か照れながら、中野と話した。

「でも、委員長は何にもしてないです。絡まれてただけです」

後藤は迷った結果、ゆいの事を中野にメールで知らせた。彼の中で、ゆいの行動が浮気に見えたらしい。

「ありがとう。また何か見たら、よろしく」

中野の言葉に後藤が頷く。『男の友情』そんな事を言いながら、二人は固く握手した。

『次は、ゆいの女友達』

友達も送ってあげるから。中野はゆいに優しい言葉をかけた。

『危ないから』

そんな言葉を添えて。

「ゆいは、甘いなあ」

中野は、うれしそうに友達を探しに行くゆいの中で呟いた。

「お仕置きは、これから」

悪魔が微笑んだ。

甘い彼女3

「京香ちゃん、本当にカワイイよね」

京香の周りには、男、男、男。皆、口をそろえて、京香を誉める。京香も、そんな事ないですよ〜と言いながらまんざらでも、ない。

「俺じゃ駄目かな？」

男達のアピールに、京香は微笑む。ああ、良い気分。

「京香ちゃん、すごくモテそうだし」

「そんな事ないですよ。京香よりカワイイ子、たくさんいるし〜」

きれいに巻いた髪を、ふるふる揺らす。化粧だって、完璧。あたしはもう、昔のあたしじゃない。地味で暗い京香は、田舎に置いて来たのよっ！

「ゆいちゃんっ」

部屋に戻ると、すっかりデキあがった太一君が。

「置いていかないでよ〜」

あたしの腕を取り、擦り寄る。犬じゃあるまいし、そんなにじやれないで欲しい。

「女の子が急に減っちゃったんだよ」

「えっ？ ドコに行ったの？ あたし、京香の事さがしてるんだけど」

太一君のテンションが一気に、下がる。

「もう、戻って来ないんじゃない？ 先輩と一緒に……。あの人が必ず誰か持って帰っちゃうから。けどね……」

聞きたい？ 太一君が耳元で囁く。そのもったいぶった言い方に、あたしはつい頷く。

「先輩、妻子持ちなんだよね」

サイシモチ。妻子。妻と子供！

「ええー！ だって、まだ大学生でしょ？」

「だよね。まあ、あれだけやってれば出来ない方がおかしいよ」

京香ー！！ 良く知りもしない人に、ついていくなー！！

「で、どこ行っただの？」

「さっき出て行ったから、まだその辺にいるんじゃない？ そんな事より、どっかいかない？ 俺、ゆいちゃんがいないと寂しくなっちゃうんだ」

再び擦り寄る、太一君の手。いけない、いけない。大学生の甘い言葉は、高確率で嘘。ていうか、その場しのぎ。なんか、『好き』って言葉が挨拶代わりみたいじゃん！

「……トイレっ」

ここにはついて来られないはず。そう思っていたのに、歩き出したあたしの後ろから太一君はついてくる。ヤバイ。あたしは太一君を振り切るため、行きたくもないトイレに駆け込んだ。

幸いトイレは男女別。あたしは、ほっと胸を撫で下ろした。ふう。ため息が出る。憧れていた共学生活だったのに……。甘い言葉は信じない。そう、固く誓った。

「どうしよっかなあ……」

トイレはやたらと込んでいた。鏡の前なんて、全く空がない。外に出ようにも、太一君がまだ待っていていそうだし。ああ。面倒臭い。

『……絶対やられちゃうよね』

『いいんじゃない？ あの女ムカつくし』

『全然OKでしょっ。あっちも相当遊んでるんだし』

『先輩強引だもんねっ。けど、1回で飽きちゃう』

『京香かわいそっ』

笑い声。鏡の前で、化粧を直しながら女の子達が笑っていた。京香。先輩。

『あたしらを引き立て役にするからさあ。ムカつくんだよ！』

仕返し。そんな言葉も聞こえてきた。女の嫉妬は怖い。それは、女子校で嫌っているほど見てきた。友達の彼氏をとったら次の日は友達がいらない、なんて事も。

悩んだあたしは、携帯を取り出した。とりあえず、京香に電話を……繋がない。うーん。どうしよう。

手に持ったままの携帯が、鳴っている。どうしよう。京香の背中
は、すでに壁に預けてある。もう、逃げ場が無い。『友達が待つて
る』そう言われてついて行ったら、そこは空き部屋。

「あのっ。先輩。電話……」

先輩。そう呼ばれた男は、カワイイ色合いのチェックのカジュアルなシャツを着ている。アシンメトリーな前髪に、隠れた右目。良
く見れば、鋭い。

「じゃあ、行こうか」

強引に京香の肩を抱き、体を密着させる。ついて行ったらヤバイ。
そんな予感。

「でも、友達が……」

抵抗したくても、体がふらつく。おかしい。ジュースしか飲んで
いないはずなのに……。もしかして？

京香は自分が口にしたモノを、よくよく考えた。ジュース。先輩
が持ってきてくれたジュース。何杯飲んでも、お腹に溜まらなかつ
たジュース。

「お酒だったんじゃない……」

言いかけた京香に、先輩の口元が緩む。

「いいじゃん。初めてじゃないんだし」

やっぱり。京香は、自分の甘さを悔やんだ。『無理するから』昔の自分が寂しそうに笑った。

「で、ゆいはどうしたいの？」

いつまでもトイレから出られずにいたあたしを、中野君が迎えにきた。がっしりと、腕をつかまれ再び席に座らせられた。

「京香を……さがしてるんだけど」

「それで？」

悪魔だ。さっきだって、絶対あたしの一部始終を見てたはず。じゃないと、あんなタイミングで迎えに来れない。きっと中野君は、見てないようで全部見てる。

「どうしたらいいかなあ？」

「それはお願いしてるんですか、ゆい。僕には、妙案が無いわけではないのですが」

中野君はそこで話を止めた。頬杖をついて、見下すようにあたしの方を見た。あ、怒ってる。そうだった。あたし、門限の約束破ってたんだった。

「ご、ごめんなさいっ！こ、これにはふか〜いワケがあって……」

ちらり、中野君の顔を見上げた。目が冷たい。

「ゴメンナサイ。これからは五時迄に帰ります」

「そうですか。僕はどちらでも良いんですよ。ゆいが大人になれば、もう少し遅くても。まあ、これくらいでいいでしょう。その話はまた後で」

中野君は、何故か店員さんと呼んだ。

「はいっ」

やっぱりこの店の店員さんは威勢が……良い。

「ちょ、ちょっと！後藤君じゃんっ」

今は亡きリーゼント。背筋のピンと伸びた、後藤君。一緒の大学なのに、めったに会う事がなかった仲間。

「えっ、ちょ、もしかして……」

あたしは中野君の顔と、後藤君の顔を見比べた。にやりと笑う中野君。

「委員長、浮気は駄目っス」

その時、全てがわかった。『女友達と遊ぶ』というあたしを、中野君が何も言わなかったわけが。大学の近くで飲み会といえバココ。広くて安いチェーン店。スパイがいたなんて！やっぱり、恐ろしい……中野君。

「頼みたい事があるんだけど……」

中野君は後藤君に、なにやら耳打ちをした。策略家、中野。そんな言葉が頭に浮かんだ。

耳打ちされた後藤君は『はい、喜んで』の言葉を残し、去っていった。

「あたし、どうしたら……」

「ゆいは何もしなくていいですよ。その友達が来たら、一緒に帰りましょう」

余裕の中野君。やっぱり年上だから？そんな事をアレコレ考えていると、あたし達の横を走り去る人がいた。

「はやっ」

その人が着ていた、かわいいチェックだけが残像のように印象に残った。

京香が現れたのは、その後。後藤君に連れられ、ふらふらと歩いてきた。

「ゆいー！」

あたしに抱きつく京香。ふわり、甘い香りとアルコールの匂い。

「駄目じゃん、京香！しっかりしなよっ」

ふわふわと歩く京香を、中野君と車に乗せた。京香が心配なあたしは、いつもの助手席じゃなくて、後ろに座った。

甘い彼女4

「京香ちゃんは、本当は真面目な良い子でしょう。わかります。だから、無理する事ないですよ」

ルームミラー越しに、微笑む友達の彼氏。優しい、落ち着いた声。

「……本当に？」

目元が、熱い。初めて、自分をわかってくれる人に出会えた……京香はそんな思いに、涙がこぼれそうだった。

「あ、あたし……本当はねっ」

車の中で、揺れる体。ふわふわ、ふわふわ。何故か軽くなる口は、秘密を簡単にバラしていく。

「こんな格好して、化粧だってすっごく作り込んでるけど……。本当は……」

地味だった、高校生の京香。京香は話し出すと止まらないのか、昔の写真まで取り出して見せた。

「髪も黒かったし、眼鏡だし……。眼鏡も最近のメガネっ子みたいにかわいいわけじゃないし……」

「そうなの!？」

『信じられない』驚きを隠せない、ゆい。中野はそんな京香の話を、優しく相槌をうち聞いていた。

「化粧と服装を変えたら……世界が変わっちゃって……。調子に乗ったあたしが馬鹿だったのよー！！　ねえ、知ってる？　あたしすっぴんだと別人よ！　うっすーい昔の日本人の顔」

ゆいは、泣きつく京香の背中をずっとさすってあげた。

「何言ってるの。京香はキレイだよ！　だから、そんなに心配しないで。あたしはずっと友達だよっ」

力強く慰めるゆいを、ルームミラー越しに中野は見た。優しい、ゆい。その優しさはみんなに与えられるものなのだろうか？　自分だけが独り占めしてはいけないだろうか？　決して笑わぬ目をして、そんな事を考えていた。

京香を送り届けた後。『コーヒーでも飲みましょう』と言って、遅くまで開いているカフェにあたしは連れて来られた。

「カフェオレがおすすめですよ、ゆいには」

どういう意味だ？　と思いつつ、カフェオレを頼んだ。中野君はいつも通り、よくわからないネーミングのコーヒー。必ず、ブラック。

遅れて届いたカフェオレは、憧れのどんぶり。クリーム色の、たっぷりとしたカフェオレボウル。ミルクとホイップクリームが、別の容器に入れられてカフェオレボウルと共にトレイにのっていた。ミルク入れ放題。しかも、甘いクリーム。おすすめの理由に納得。

「おいしーいっ」

ミルクを追加したカフェオレは、薄いコーヒー色。甘くて、優しい。あたしを甘やかす、味。

「幸せそうですね、ゆい」

うんっ。無邪気に返事をするあたしに、中野君が……冷たい目で見てる。

「今、何時か知ってますか」

「えっと……」

「何ですか？ 時計の針、読めませんか？ でしたら携帯で確認しますか？ デジタルで読めないとは、言えませんかからね」

時計は……九時を過ぎていた。門限は五時。遅れた理由は……。あたしはもう一口、カフェオレを飲んだ。……味がワカラナイ。中野君の前では、どんなスイーツも慰めにはならない。そんな、気がする。

「で、何時ですか？」

「く、九時……過ぎ」

「では、約束の門限は？」

「ご、五時。五時です」

中野君は笑みを浮かべ、こちらを見ている。笑っていない目が、余計に怖い。

「お友達、無事で良かったですね」

お友達、京香の事かぁ。本当に良かった……けど。

「どうやったの？京香の話だと、飲まされて連れて行かれそうだったんでしょ？」

京香の話だと、店員さん（多分、後藤君）がその先輩に話しかけたら先輩が顔色を変えて出て行った、と。中野君は、後藤君に一体何を言わせたのだろうか。ん？それ以前にどうやって先輩だとわかったのか？

「妻子がいるって言ったでしょう？女連れの男に『奥様から電話がありましたけど』って言ってもらったただだよ。後ろめたい人間は、すぐに顔色を変えますからね」

「そういうもののなの？」

「はい。ゆいだってそうでしょう。僕の顔を見た瞬間、顔色が変わりましたよ」

「うっ……」

ちくちくと、中野君は嫌味だ。せっかくの美味しいカフェオレが台無しだ。けど、今日はあたしが悪い。それに、中野君がいなかったらどうなっていた事やら……。

「でもね、ゆい」

中野君が、カップを置いた。

「僕の顔色も変わりましたよ、今日は」

「何で？ うしろめたいとか？」

「ゆいと一緒にしなさい下さい」

あきれ顔の中野君。

「ゆいに何かあったら……僕は正気でいられないかもしれません」
「えっ……」

何か、恥ずかしい。中野君は、やっぱり意地悪だ。正直な愛情表現に、あたしの顔が熱くて……堪らない。

「後でコンビニに行きましようね」

お泊りグッズ。中野君の言葉の意味がわかった時、あたしはカフエオレを吐き出してしまいそうになった。

「嫌ですか」

ふるふると、顔を横に振る。中野君の家。一人暮らしの部屋。まだ、そういう事は……。想像すると、頭が痛い。どうも、今日は変な感じだ。

「大丈夫ですよ。何もいませんから」
「嘘!？」

くつくつと中野君が笑う。

「何か、した方が良いみたいです」

何か……。

「ちょ、ちょっと。べ、別にして欲しいとか……。ていうか、何?もう、ヤダ」

顔が熱い。いつかそうなるのかなあ、なんてぼんやり思っていたけど……。心の準備、いや、体の準備が……。

「てか、何考えてるのっ。あたし」

中野君は、ずっと笑っていた。

「大丈夫ですよ。ちゃんと家まで送ってあげます」

中野君はそう言って、コーヒーを飲み干した。あたしは、どんぶりに残った薄いコーヒー色を見つめた。『送ってあげます』ふうん。そっか。やっぱ、あたしにはそういう魅力がないんだ。

帰りは助手席で。あたしは流れる車窓と、複雑な気持ちで向き合っていた。車は見慣れた景色を抜け、あっという間に家に辿り着いた。

「どうしたんですか？」

そんなの。言えるわけじゃないじゃん。別に。なんてそっけなく呟いてみた。

「泊まりに来ますか？ そのかわり、何もしませんけど」

「なっ！ そんな事、言ってますん」

「そうですか」

なんか……このまま家に帰りたくない気がする。中野君は、あたしの事を好きだというくせに……そっけない。

「ねえ、中野君。一人暮らし……寂しい？」

そうですねえ……。中野君は、少しだけ考えるポーズ。

「慣れてますからね」

寂しいのには。暗い車内で、中野君の白い肌がぼんやりと浮かぶ。

「なんかねっ。……寂しくなるから、そっちに行ってもいい？」

中野君は驚いたのか、目を見開いたまま固まっている。

「良いですよ。ゆいが願うのなら、僕は何だって大歓迎ですよ」

その代わり。そう言って中野君の顔が近づく。

「何もしませんよ。抱き枕みたいに、大事にしてあげます」

中野君のキスは、なんだかやらしい。唇が触れる時より、離れる時に感じる余韻。

車は、そのまま中野君の家へ。

あたしは一晩。初めて中野君の家に泊まった。

「教えてあげましょうか」

本当に、抱き枕のように抱きしめられたまま眠った翌朝。中野君はとんでもない事を言い始めた。

「何を？」

「昨日の夜、何もしなかった理由」

「なっ、何を。そんなの……。聞きたいけど、聞いてもあたし傷つかない？」

朝は中野君の淹れてくれた、コーヒー。もちろん、甘くてミルクイ。

「大丈夫ですよ」

「じゃあ、教えて」

中野君はわざわざ、耳元で囁いた。

『勝負下着じゃなかったから』

「はあ?？」

意味がわかんない！

「ゆいは初めてでしょう？ だったら勝負下着だとか色々……。ひとり考えていそうじゃないですか？ そう思ったらもったいなくて。成り行きじゃなくて、ちゃんと予告してあげた方が……。楽しそうじゃないですか」

「なーかーのーくん!!」

顔が熱い。もう、そんな事を言われたら本番どうすればいいの？
中野君！ あなたあたしに、どれだけ恥ずかしい思いをさせれば
気が済むの！

あたしはコーヒークップを握り締めて、中野君に背を向けた。

「もう、やだ。絶対そんな事しないんだから！」

精一杯憎らしい声を出して、そう言った。中野君は……何も言わない。どうしたんだろう？ 気になるけど、背を向けたのはあたし。

「機嫌を直してください」
「！！」

反則だ。中野君は、包み込むようにあたしの背中を抱きしめている。
る。

「本当は、まだ自信がなかったんです。完全に恋人になってしま
うのが」

「……どう、して？」

背中に、中野君の体温が伝わる。冷たく見えた中野君の……。あ
たしよりも少しだけ高い温度。

「僕は、完全にゆいを手に入れてしまったらどうなるでしょうね。
きっと、手放す事が出来なくなってしまう。それが……ゆいを
傷つける事になったとしても」

背中が、寒い。中野君はあたしからそっと体を離れた。

「僕は、それが怖い」

中野君の、闇はまだ終わっていない。あたしは、胸が詰まってしまふようで……苦しかった。

「けど、中野君!」

あたしは中野君の闇にも、負けない。これまでだって、蹴散らしてきたんだから。

「それじゃあ、あたしいつまで……」

言いかけて、止めた。いつまで……。うーん。良い表現が浮かばない。

「大丈夫ですよ」

中野君はあたしの言いたい事を察したのか、またくつくつと笑い始めた。『大丈夫』って、本当なの??

「本当に? 約束だからね!」

あたしは顔を真っ赤にしたまま、小指を差し出した。

「嘘吐いたら、針千本じゃすまないんだからっ」

あたしの小指に、中野君の小指が絡む。小さくて短いあたしの小指。中野君のキレイな指がするりと絡まる。

「ゆいは良い子ですね。奪わなくても、僕に与えてくれる」

「ん？」

「では、主導権もゆいにあげますね。僕はいつだって、ゆいの言いなり」

そう言って、またキスをした。中野君はキス魔だ。しかもやさしい。

「ゆいは甘いですね。でも、僕は甘くありませんよ」

それは、コーヒーの話。
それとも……。

言いなりなのは、あたしの方じゃないの？

ゆいは、長くて甘いキスに翻弄されながらそんな事を思っていた。

甘い彼女4（後書き）

番外編どうでしたか？

相変わらずのせられている、ゆいちゃん。

このままで大丈夫なのでしょう？

このお話、登場人物が多いのでまた機会があれば書くかも？

リクエストがあれば、お気軽に。

感想よろしく願います。ユーザーで無い方は拍手の方によりしく願います。

メッセージがあると本当に励みになります。では。

浮気（前書き）

短編です。

浮気

「ねえ、中野くん。浮気ってどこからが浮気なの？」

事の始まりは、何気ない一言。そう、それは迂闊なあたしの不用意な……一言。

「浮気ですか？」

あたしは軽く頷いて、晴れた空を見上げた。なんて気持ちの良い空なんだろう。あたしは木漏れ日に手を翳した。ここはあたしの一番のお気に入りの場所。枝を広げた木と、短く切り揃えられた芝生。ここは大学の構内で、あたしが一番のお気に入り。この木は二人でくつろぐには丁度良い日陰をつくってくれる、優しい場所。

「何かね、人によってその辺のボーダーラインが違うんだって」

手にした紙パックは、美味しそうな茶色。飲む度にぺこっと軽い音を立てては、冷たい雫を放つ。小さな粒々の汗をかいた、甘いコーヒー牛乳。

「だからね、一回聞いてみたら？ って……」

そう言ったのは、京香。浮気のボーダーライン。あたしはストロ―をくわえたまま、隣の中野くんを見た。初夏でも涼しげな横顔、小振りの真っ黒な缶コーヒ―。きつと……甘くは無い。

「聞きたいですか？」

穏やかな、休憩時間。穏やかではない風が吹いた。

「……ですよ」

あたしは耳を疑った。

「……えっ？」

驚いて聞き返すあたしに、中野くんは柔らかく微笑んだ。

「体を合わせたら、でしょう？」

天使のような笑みを浮かべた、中野くん。

「……へっ？」

あたしはストローから口を離し、そのまま固まった。

「だから。体のある一部分を合わせたら、でしょう？」

中野くんはそう言って、風で乱れたあたしの髪を指で直した。指先があたしの頬を伝い、耳を撫でた。

「わかりますよね、それくらい。わからないのなら、丁寧に説明しますけど……」

コーヒーの香りが近づく。気が付けば、中野くんの顔が目の前にあった。

「わ、わ、わかりますっ。わかってますっ！ 本当に……わかってま

すっ
」

中野くんはいつも苦い方のコーヒーを飲む。だからキスする直前の合図は、ビターな香り。中野くんの接近を知らせてくれる、サイン。

「本当にわかりますからっ」

でも、ここは昼間の大学。あたしはそこまでオープンじゃない。

「本当ですか？」

あたしは疑う中野くんを見ながら、何度も頷いた。

「では、ゆいはどうですか？」

浮気のボーダーライン。

「僕が他の人と……どこまで許せますか？」

中野くんが、他の人として嫌な事。あんな事？　こんな事？

「やっぱり……」

考えようとするあたしの脳裏に、さっきの中野くんの言葉。なんて……卑猥。中野くんの事だ。あんな事もこんな事も……。きつと……だよな？　いや、でも……。頭の中の中野くんはエロちっくで、想像の世界の浮気相手はすぐくセクシーで……。うーん。どうしよう。きつと、あたしじゃ敵わない。

「中野くんと同じかも……」

あたしはそう言って、ストローをくわえた。ぬるくなったコーヒ―牛乳が、あたしを慰めるようにさっきより甘い。

「……悲しいけど」

大人な中野くん。いつまでも大人になれないあたし。きっと、入り込んできたセクシーには敵わない。

「……諦める」

「えっ？」

「そうになったら、諦める。だって、中野くんにはもつと……。それにその人の事が好きなんだろうし……。中野くんの幸せは邪魔したく……。ないもん」

何気ない会話だったはずなのに、胸が少しだけ痛んだ。甘いコーヒ―牛乳も、次の一口を飲む気にはなれなかった。パックにささったストローが、まるで胸にもささっているようなそんな気がした。

「中野くんが幸せな方が、いいもん」

精一杯のあたし。隣を見ると、中野くんがいない。

「えっ……」

穏やかでない風が吹いて、あたしは目を細めた。いなくなった中野くん。中野くんがいなくなったら……。どうすれば、良い？

「……そんな所にはありませんよ。僕の幸せなら、ここに」

こつんと後頭部に何かが当たった。半袖のあたしの腕に、さらりと滑る人肌。後ろから香るコーヒ―は、いつも通りのビター。苦くて、甘い。

「ゆいは諦めない人でしょう？ バカみたいに正直で、下らない事にも真っ直ぐで。僕はね、ゆいがいれば幸せですよ。ゆいと引き換えの幸せなんて、あるはずも無い」

中野くんの言葉は、いつもどこか切ない。あたしはそんな中野くんを見る度に、自分に何ができるのか探してしまう。幸せにしないじゃ。切なさが刻んだ、心の奥の傷。

「それに……」

あたしの背中を包む、中野くんの体。華奢だと思っていたのに、なんだか力強い。半袖になったせいかな、あらわになった筋肉。白い肌に浮かんだ血管に、中野くんの確かな存在を見たようで少し和んだ。

「僕は浮気を許しませんよ」

「えっ？」

抱きしめる腕の力が、強くなる。そう、そんなに彼は甘く……無い。

「縄でも、鎖でも。何なら、檻に閉じ込めてしまいませんか？」

それでも良ければどうぞ」

それでも浮気しますか？　そう耳元で囁く声は、悪魔の声。ぬるくなった紙パックのジュース。汗をかいたのは、あかし。

「……絶対しません」

ええ。神に誓ってしめんとも。

「ところで、ゆい。ゆいの浮気のボーダーラインは？」

涼しげな声の中野くん。

「中野くんと同じだよ」

体を合わせたら。

「そうですか？　ゆいも意外と束縛するのですね」

意外と？？　嘘？　これって普通だよな？

「えっ？　浮気っていったら、みんなそこからでしょ？」

振り返るあたしの目に、悪魔の笑顔の中野くん。

「ゆいの浮気のボーダーラインは、僕と同じでしたよね？」

うん。あたしは迷わず頷いた。

「そして、浮気は絶対にしない」

うん。あたしは再び頷いた。

「じゃあ、ゆいは僕から目が離せませんね」

「ん？」

「知ってますか？ 僕の浮気のボーダーライン」

あたしは中野くんの言っている意味が、良くわからない。

「目を合わせたら、浮気ですよ」

「……ええっ!!」

あたしは驚いて中野くんの腕をすり抜けた。視線？ 体の一部分
って……。

「うっそ!？」

あたしは中野くんに向き合って、その目を見つめた。

「だって、体を合わせたらって言ったじゃん!」

「……だから、目。視線」

「はいっ?？」

あたしは中野くんから目が離せない。

「ゆいの目は、体の一部分では無いのですか？ それとも節穴ですか？」

「ちょっと……そんなっ」

「良く見せて下さい」

木漏れ日を遮るのは、ビターな彼。

「んっ」

あたしは、直視できずに目を閉じた。

「ひゃっ……」

初めての体験。とろりとした、少し卑猥な感触。

「……大丈夫ですよ。ちゃんと体の一部分でしたから」

しれっとした顔で微笑む中野くん。

「何……それ。っていうか……何、今の？ 何？ 何？ 何だったのよー！！！！」

恥ずかしさと疑問でいっぱいの中野くん。今は、やらしいの？ 何だったの？ キスより上なの？ 下なの？

「許して下さいね、ゆい。ゆいの全ては、僕のもの。だから……」

許して下さいね。耳元で中野くんが呟いた。

良く晴れた空の下。

「なっ……」

彼の言葉には、裏がある。

『許して下さいね、ゆいの体の全部は僕のもの』

やっぱり彼は、甘くない。翻弄されるのは、いつだって私。

浮気（後書き）

中野くんのキャラが好評だったので、調子にのって番外編追加しました。

感想よろしく願います。

だんだんバカップルになっていくようで、ちょっと心配です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4910j/>

甘い彼女と甘くない彼氏～その後のThe Great Escape～

2010年10月10日12時14分発行